



Title	樺太犬の発見 : 1930年代後半の日本領期樺太を対象として
Author(s)	増子, 美緒
Citation	文化/批評. 2011, 3, p. 129-146
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/75768
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

樺太犬の発見

——1930年代後半の日本領期樺太を対象として——

増子美緒

はじめに

樺太（現、サハリン）先住民のニヴフ、アイヌ、ウィルタ族は冬の間の交通手段である犬橇のために犬を飼養していた。1905（明治38）年、日本が北緯五十度線以南の南樺太を領有して以来、当地に入植した日本人はその犬を「樺太犬」と呼び、様々な用途で利用していった。樺太島民と樺太犬との関係について、樺太庁農務課の職員であった有松志郎という人物は次のように記している。

夏は車を曳かせ、冬になれば橇を曳かせて物を運搬してゐることや、スキーを曳かせて雪中を馳駆してゐることなどは、たしかに樺太名物の一つとして、日本全国に誇り得べきものであらう。おそらく犬をあれ程までに、我々の日常生活に結びつけて使役してゐる地方は我が樺太を措いて他にはめつたに見ることの出来ない風景である [有松：1937a：150]

この文面から、樺太犬がいかに島民の生活と結びついていたかがみてとれるだろう。しかし彼らの存在は、日常の中に入り込みすぎていて特別に意識されていなかったのかもしれない。じつのところ樺太犬は犬種として確立されていたわけではなく、呼び名自体が「誰いうとなしにつけられた名称であり、とくに専門的に定義を下してつけた名前ではなかった」[犬飼：1959：4] ののである。樺太では、1930年代半ばからこの犬のもつ耐寒性や軌曳力など実用的な価値が評価されるとともに、学術的研究が端緒についた。島内にいた犬のなかから純粋な樺太犬が選別され、軌曳能力に優れた「樺太犬」という犬種を創りだそうとする動きがおこったのである。

樺太犬はいかに発見され、「樺太犬」という存在の創出がこころみられたのだろうか。本稿では、樺太犬が発見されていった状況について、1930年代後半の樺太を対象として『樺太日日新聞』における樺太犬関連記事やこの犬に関心をよせていた研究者、愛犬家の著作を参照しながら辿って行きたい。

1. 日常のなかの樺太犬

有松が「夏は車を曳かせ、冬になれば橇を曳かせて」と書いていたように、樺太犬は一年を通じて様ざまな労働に従事していた。動物行動学者の犬飼哲夫によると、樺太における犬の労働は挽曳を主とした長距離および近距離の移動用の犬橇、木材の山出しのほか、市街地では商店や家庭での物資運搬であった〔犬飼：1939 ほか〕。

犬橇は冬季の主要な交通手段であり、長距離では7～8頭曳き、近距離では3頭もしくはそれ以下で人や物資を運んでいたという。豊原や大泊など南樺太の中心部であった南部では、明治・大正期をつうじて道路が整備され、汽車や自動車が普及していったため、交通手段としての犬橇は衰退していったが、一頭曳きや二頭曳きの犬橇は商店をいとなむ小企業者に利用され、一年を通じて荷を曳いていた〔犬飼：1939〕。樺太出身者であり交通史の変遷をまとめた中尾重一によると、樺太では「使用人を雇い入れるよりも犬を飼った方が利益が上がって得だ」〔中尾：



図1 小距離の移動に用いられた犬橇
（『樺太日日新聞』1935年11月21日付）

1981〕と言われ、各商店では二、三匹の犬が飼われていたという。また、一般家庭でも犬橇は普及していたようで、『樺太日日新聞』1935年11月21日付には犬橇で買い物へ出かける様子が樺太の冬の風物詩としてとりあげられている（図1）。雪の降り積もった冬の間、除雪もままならなかった樺太において、日常的な買い物など短距離の移動では馬よりも犬橇のほうが便利で身近であったのだろう。

ところで北部では1936（昭和11）年に国境ちかくの敷香まで東海岸鉄道が開通したが、交通や開発は南部よりもやや遅れてのことだった。そのため南部では時代遅れとなりつつあった交通機関としての犬橇が十分に活躍していたのである。犬飼は1922（大正11）年、ロシア領であった北樺太で、1940（昭和15）年南樺太の敷香で樺太犬の基礎的調査を実施しているが、敷香での情景について「冬の敷香の街は犬の活動で画に見る夢の国の感があつた」〔犬飼：1959：34〕と回想している。

また、豊富な森林資源を背景とした製紙、パルプ産業は樺太の主要産業の一つであった

が、その原料となる木材を伐り出し、丸太に加工して山から運び出す作業にも馬や犬の力が欠かせなかった。出稼ぎ労働者として樺太へ渡り、造材現場で木材の伐採を行っていたある古老の男性は、樺太の山で驚いたことの一つとして犬糞とその速さをあげている [野添・田村編：1977]。

このように樺太での生活に犬は欠かせないものであったが、それは労働という側面だけではなかった。樺太の「鳥技」といわれたスキーは、領有当初から盛んに親しまれていたスポーツであったが、そのスキーと「犬」とを連結させた「犬スキー」というものがあつたのである(図2)。樺太においてスキーの普及につとめた桜庭留次郎は、犬スキーを奨励し、『樺日』を通じて犬スキーの練習法を紹介し、また、それによる遠距離踏破を試みている(『樺日』1919年2月23～27日・3月1、5～6日付)。



図2 「樺太犬そりスキー」(絵葉書)
(稚内市教育委員会所蔵)

このように、樺太犬と樺太島民は生活を通じて密接に関わりあつてきた。そしてその結びつきは樺太の冬の風物詩や名物として内外で位置づけられてきたのである。たとえば『東京朝日新聞』1929年1月23日付には、「我輩は樺太犬である」という見出しで荷をひく樺太犬が次のように描写されている。

内地の諸君、あなた方の家に飼はれて居る犬は何の働きがありますか。東京あたりの犬でしたら、昨今は出来のよいところで説教強盗とやら防ぎの張番くらいのものでせう。(略) 御承知の様に、樺太は半年は島民即ち永山雪野に閉ざされますので、この中にあつて働く人、商売する人等々は交通に、運ばん〔ママ〕に不便を来します。こゝにおいて我輩等は内地犬とは違つて御主人飼主の苦勞を思ひ、御恩報じに当るのです。(略) (『東京朝日新聞』1929年1月23日付)

ここから、内地では馬や牛のように働く犬が非常に珍しいものとして捉えられていたことがわかる。このまなごしにより、樺太犬の働く姿は樺太特有の名物として位置づけられ

ていたのだろう。けれども実際の犬たちにたいする処遇は冷酷なものであった。樺太では1915（大正4年）9月に「畜犬取締規則」が制定され、飼犬は警察に届け出ること、鑑札をつけ鎖で繋いでおくこと等が義務づけられた。同年の『樺日』9月16日付記事では、「畜犬取締規則」の制定に関して次のように書かれている。「(…)世間の犬公方は本嶋の如き交通機関の不備な互寒な所では犬橿がどれだけ効用があるか知れぬ、駱駝が砂漠の船から犬橿は雪中の車だとか氷上の電車だとか、曰く何、曰く何とか謂ふが西伯利亚や北樺太の様な人煙稀疏な平原なら良いが現在の樺太では犬橿よりも遙かに馬橿が最も適当である、而も橿犬は性獐猛な事は人の知る通りである、兎に角今回の畜犬取締は機宜に適したものと云わねばならぬ」（『樺日』1915年9月16日付）。橿を曳く橿犬は「獐猛」で、犬橿それ自体はやや時代遅れなものである、と犬橿や犬に対する評価は辛辣である。というのは、樺太ではほとんどの犬が放し飼いの状態であったため飼い犬か野良かの判断がつかなかったし、島内の犬すべてが労働犬というわけではなかったからである。同じ時期に東洋家政女学校長であった岸辺福雄が樺太へ旅行した際の土産話として、悪路のなかで懸命に車をひく馬の働きぶりと、「其処等中にごろゝしてゐる純日本種の犬の群が何もせずぶらゝしてゐる事」（『読売新聞』1915年8月24日付）をあげているが、漁村では彼らによって家畜や魚が食い荒らされることに頭を痛めていた。また時代が下るにつれ、樺太を代表する養狐産業にとっても甚大な被害がもたらされるようになった。養狐場に野犬の群れが侵入し、これに驚いた親狐が仔狐を雪中や巣箱に隠し死亡させるといった被害がおこったのである（『樺日』1934年4月3日付）。そのため野犬狩りは頻繁に行われていた。このように同じ犬であっても、労働に従事する犬は樺太犬と呼ばれて評価され、一方では駆除の対象とされるなど、彼らに対する処遇は対照的なものであった。

2. 樺太犬の発見

2-1. 「畜犬陳列会」の開催

有松は樺太犬と島民との結びつきを強調していたが、その結びつきを島民は自明のものとしていたのだろうか。確かに樺太犬や犬橿は樺太名物として位置づけられていた。しかし実際の樺太犬は日常生活の「中」にあり、特別意識される存在ではなかったのではないだろうか。犬飼によると、樺太犬が注目されるようになったのは「南カラフト北部での冬季間の労役のため」[犬飼：1959：36]であった。太平洋戦争が近づくにつれ、それまで主要な使役動物であった馬が軍用馬として戦地へ供給されたため、その「代用」として犬（樺太犬）が造材現場や郵便物の運送などの運搬業務に本格的に利用されるようになったのである。この実用化と並行するかたちで樺太犬の学術研究は端緒につき、樺太犬の保護

そして種としての確立すなわち「樺太犬」を創出する必要性が説かれるようになった。こうした背景のなかで、樺太犬は日常のなかから「発見」されたのではないだろうか。

ここでは樺太犬への関心の高まりを示す具体的場面として、1936（昭和11）年、豊原で開催された「畜犬陳列会」をとりあげて見ていきたい。この催しは南樺太領有から三十年にあたる1936（昭和11）年8月、樺太庁が「本島領有以来現在に至る拓殖進展の趨勢」〔高橋：1937：序〕を島民および内地へと紹介するために開催した「樺太拓殖共進会」の付帯行事の一つであった。「樺太拓殖共進会」は豊原と大泊の二市を会場とし豊原には農畜、林、鉱、工業品が、大泊には水産物など樺太を代表する特産物が集められ、「畜犬陳列会」は8月19、20日の二日間、豊原会場の畜産陳列会の使用跡地を使って開催された（『樺日』1936年1月19日・8月1日付）。『樺日』紙上でこの催しに関する記事が登場したのは、管見の限りでは1936年3月15日付、「樺太犬の再認識へ／共進会で宣揚／冬の功績を讃ふ」と題された記事が最初である。

樺太犬の労働価値といふものは今更云ふ必要もないくらい樺太の冬の運搬機関として大きな役割を果たしてあるが、最近では軍部や内地方面でもこれに注目し昨年は大湊要港に六頭、内地には可成り沢山の頭数で送られてある、このため樺太庁では本年八月開催される始政三十年記念の共進会で畜産のうちに樺太犬を含み島民及内地人に樺太犬の価値を再認識させようと目下農務課に於て計画中である。

続く6月28日付では、企画段階での、競技内容や参加規程等が発表されている。競技は「畜犬の陳列」、「畜犬の市内行進」、「犬訓練軍」、「実演公開」、「樺太犬軌引競争」、「犬橇実演公開」が企画され、参加者（犬）を募るためか、事務局が置かれた樺太庁林業課および樺太軍用犬協会では、出場犬に補助金を付与するとしている。すなわち出場犬の自動車輸送費、開催期間二日分の食糧費（豊原市街、一日につき50銭）である。また、樺太犬の軌引競争では「使役犬としての性能を審査」し、一等から三等まで賞金が出されることになった⁽¹⁾。

「畜犬陳列会」の競技内容および当日のスケジュールが本決まりとなったのは、開催間近の7月31日のことであった。『樺日』8月1日付によると、31日午後1時から3時まで「共進会畜犬品評会係員」による協議会を通じて初日（19日）は午前9時から楽隊付の「犬の行進」が、20日に樺太犬の軌引競争と軍犬の訓練が行なわれることに決定した。なかでも見どころは初日の犬の行進であり、「盛装した犬の行進は初めてのことであり壮観を呈するであらう」と期待されている。31日の時点でエントリーしていた犬種は樺太犬、

シェパード、エアデール・テリア、ドーベルマンの軍用犬種のほか、猟犬などそれ以外の犬であった。当初は樺太犬 25 頭、軍用犬種が 20 頭、猟犬が 25 頭で計 70 頭の参加が予定されていたが、有松によると当日は少し減り樺太犬 35 頭、軍用犬種 20 頭で、その他の犬とあわせて計 60 頭余りであった〔有松：1937b：136〕。

当初の予定通り 19 日には「犬の行進」が、そのあと軍犬、洋犬、樺太犬が「陳列」され、20 日には軍犬「太郎坊」の訓練が披露された。しかし『樺日』では「畜犬陳列会」開催までの道程を逐次伝えていたにも関わらず、肝心の当日の様相については殆ど取り上げていない。しかも樺太犬の轆引競争に関する記事はほとんど見られず、軍犬の訓練のみが伝えられている。つまり「畜犬陳列会」のメインは樺太犬ではなく軍犬のほうにあったのである。

『樺日』8月19日付では「曲芸ではありません」という見出しで前日（18日）の軍犬の予行練習を写真付きで紹介しているほか（図3）、翌20日は、「ワン公に人気／気分横溢の拓共会場」と題して次のように伝えている。

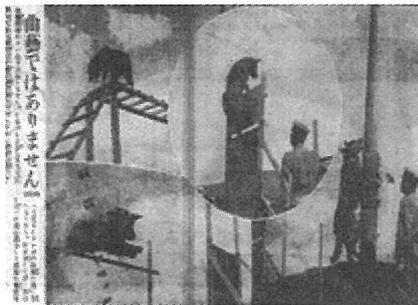


図3 軍犬の訓練の様子

（『樺太日日新聞』1936年8月19日）

十八日豊原会場は午前中八千三百十名、多からず少からずの観覧者で天候もよく風も渡り絶好の拓共日和である（略）／一方畜産共進会跡では午前十時楽隊付で町内行進を行つた軍犬外、洋犬、樺太犬が陳列され人気を呼んでゐるが軍犬の梯子渡りの「足」に見る緊張は痛ましい位の真剣に観衆片唾をのんで其のいぢらしい姿を凝視してゐる／会場の放送塔朝から畜犬品評会の行はれることを知らせてゐたが軍犬「太郎坊」の訓練、々々と何度も同じことを行つてゐるので過ぎたるは及ばず約一時間同じ放送を聴かされた観衆は「うるさいナ、もう判つたヨ」と怒り出してしまつたが、それでも止めずやつてゐる中に本物の訓練は終つてしまつたのであるト（『樺日』1936年8月20日付）

以上で「畜犬陳列会」の概略を辿ってきたが、この催しには二つの目的が据えられていたようにみえる。一つは軍用犬種の飼育を広めることであり、二つは先にみた8月1日付の記事にあるように、樺太犬の労働価値を「島民及内地人」に「再認識」させることである。

一つめの目的について「内地」における軍部による軍用犬への注目が挙げられる。すなわち犬を戦地に送りこみ、伝令、運搬、守衛（警備）、衛生（負傷兵の搜索や誘導、救急材料の搬送等）など実役の任につかせるための訓練は1919（大正8）年、千葉の陸軍歩兵学校で軍用犬研究班が設置されたことにはじまり、1931（昭和6）年の満州事変を契機として関東軍による当地の警察犬利用や国内での軍用犬の飼育奨励がなされるなど発展期をむかえた〔今川：1996〕。豊原においても帝国軍用犬協会の支部が設置され、1936（昭和11）年時点で「軍用犬種の飼育が暫時流行」〔有松：1937b：128〕していたという。つまり軍用犬の公開競技が盛り込まれたことは、軍用犬飼育を普及させる意図があったものと考えられるのである。二つめの目的について、後述するように当時は樺太犬の軍用化が試用段階とはいえ進展しつつあった時期であるとともに⁽²⁾、馬匹代用の労働力として実用化されてゆく状況にあった。実用化によって樺太犬に労働価値が与えられたのであり、「畜犬陳列会」というイベントを通じてその価値を内外に知らしめる意図が含みこまれていたのである。だがこれまでみてきたように実際の「畜犬陳列会」では軍用犬に重きが置かれており、樺太犬の陳列および競技は呼び物の段階にとどまっていたのではないだろうか。そのなかで樺太犬に特別な視線を注いでいたのが有松であり、敷香「オタスの杜」⁽³⁾に設置された「敷香土人教育所」の所長、川村秀弥であった。

2-2. 「畜犬陳列会」の意義

樺太犬研究はおよそ1935年から1940年のあいだに急速に蓄積されていくが、このなかで樺太犬に注目した人物には犬飼のような動物学者だけではなく、樺太庁の役人であった有松のような一般の人も含まれていた。様々な人が様々な立場から樺太犬とその重要性を語ったのである。農務課の技官として「畜犬陳列会」に携わっていた有松は、「樺太犬を語る」と題する論考のなかで「畜犬陳列会」について言及している〔有松：1937b〕。そこで彼は轆曳競争について「初めての試みとしては、非常に盛会であり有効であった」と振り返りながら「心付いた二三の点」をあげている〔有松：1937b：136〕。その「心付いた」点とは、轆曳競争のための細かな規則、年齢および体型ごとに区分して競技をおこなうこと、犬の分類ごとに競技種目を分けること、競技の最中に飼い主が犬の前でないこと、競技種類を「重量轆引競技」、「耐久競技」、「訓練競技」の三種目に分けることであった。有松はなぜ、このような規則を設定したのだろうか。それは彼が樺太を代表するものとして樺太犬を捉え、かつ実益化することを目指していたからである。「樺太犬の保護と其の繁殖」と題する論考のなかで有松は樺太犬が轆曳能力においては内地の犬よりも優れていること、そして「吾々の実生活の上からしても切り離されぬものがある」〔有松：

1939：44]と島民との結びつきを強調したうえで次のように述べている。「この様に非常に優秀な性能を持つてゐる樺太の犬を内地の人々にも紹介し、且つ実益使用することは吾々の務めであると共に樺太が持つ一つの大きな誇りであると云はねばならぬ」[同：44-45]。つまり軌曳競争は「軌曳」能力の優れた樺太犬を創りだすための訓練として想定されていたのである。

自ら樺太犬を飼育・改良し、樺太犬の実態や樺太犬とギリヤークら北方先住民族との歴史的関係について『樺太日日新聞』や愛犬雑誌『日本犬』誌上で論考を発表していた川村秀弥は『樺日』1936年6月27、28日付「樺太犬に就て」のなかで樺太犬と陳列会に言及している。樺太犬の置かれている現状について「何れを以て純粋樺太犬と見做すべきか判断に苦しむ状態」、すなわち雑種化が進行していること、そして「近來日本犬熱の勃興に連れて」樺太犬を調べに来たり優秀な樺太犬を入手しようとする人がいること、小樽地方では軌曳犬として利用されていること等、樺太犬が樺太島外から注目されている状況にあったことを報告している。1930年代は内地において「日本犬」が誕生した時期であった。「洋犬にあらずんば犬に非ざるかの如く宣伝」[日本犬保存会：1978]されていた当時の畜犬界において、日本の在来種の雑種化、絶滅を危惧した斎藤弘吉は1928（昭和3）年、「日本犬保存会」を設立し、史跡名勝天然記念物保存法という制度を利用して「日本犬」保存活動に邁進する。1931（昭和6）年にはじめて秋田犬が日本犬として天然記念物に指定されて以降、日本犬の発見と保存の運動は本州だけでなく朝鮮や台湾、そして樺太等の植民地へも波及していった⁽⁴⁾。たとえば保存会理事の小松真一は、「日本犬を研究するに当たつては我が版図の最北に位する樺太や北海道に飼養されてゐる犬を調査するのが一つの要件である」[日本犬保存会：1978：10]として、1931（昭和6）年、いち早く北海道と樺太へわたり北海道犬と樺太犬の調査を実施している。このように、内地方面で少なからず注目をあびているのにもかかわらず、樺太島民のあいだにこの犬の重要性は未だ十分に認識されていなかった。川村は「樺太犬の人が無関心で居る間に優良犬を引き抜かれてしまつたら後日に悔いを残すことはないだらうか」と、島民の関心の低さに危機感を抱き、島民の認識を是正する機会として「畜犬陳列会」の開催を賞賛している。

今村長官は樺太犬に関心を持たれ今夏の品評会に樺太犬の出陳を計画せられて居ると聞かすのが快心に堪えない次第である、郷土愛の心を島民に植付ける上にも頗る有意義の施設であると深甚の敬意を表する。希は此の機会に於て埋れたる樺太犬を広く紹介し、併せて積極的の保護法を設けて戴きたいものである。（『樺日』1936年6月28日付）

同記事では樺太犬の性能についても述べられている。樺太犬には「日本犬の特長とする一生一主の傾向は樺太にも立派に認められ」と日本犬との同質性を指摘する一方で、日本犬との違い、すなわち樺太犬の特性として「粗食を厭はず、寒気に強く、飢餓に耐へ重荷を挽き、長途疾走の持久力の大なること」があげられている。曰く、「樺太犬は人口淘汰の加へられて居ない犬で、優良な素質の顧みられなかつたものであるから、之に適當の改良淘汰を施したならば、或ひは日本犬、愛奴犬に劣らぬ働きをし得るものと信ずる」（『樺日』1936年6月28日付）。川村は、島民に樺太犬が樺太を代表する犬であることを自覚させる最良の機会として「畜犬陳列会」を位置づけ、その効果に期待をよせていたのである。

2-3. 樺太犬研究と実用化

以上「畜犬陳列会」を通じて、1930年代の樺太における樺太犬への関心には、馬匹代用の労働力や軍用犬など実用的な側面だけではなく、内地との関わり、すなわち日本犬熱の影響があったことがみえてきた。しかしこの犬が最も注目されるようになったのは、前述したように太平洋戦争開戦による馬不足が問題となり犬の需要が増したためであった。そしてこの時期、並行して樺太犬の基礎的研究が積み上げられていった。樺太犬とはいったいどのような犬でどこから来たのか、その系統、言い換えれば起原が辿られ、この犬の体形、毛色、そして挽曳犬としての性能など樺太犬の全貌を明らかにする作業が、先にあげた川村や有松のほか樺太庁博物館の高橋多蔵、犬飼哲夫らの手で行われたのである。以下では樺太犬への注目すなわち実用化と研究がどのようなものであったのか、この犬の価値がどのように発見されていったのか、先行研究や『樺太日日新聞』から概観したい。

「畜犬陳列会」の開催された1936（昭和11）年、樺太庁中央試験所（以下、「中試」と略）では早く樺太犬の経済的飼養試験に着手している。その目的は、樺太犬は物資の運搬や冬季の交通機関として使役されるなど其の価値が一般的に認められつつある一方で「未ダ之ガ経済的ナル飼養方法ニ関シテハ研究セラレタルモノナキヲ以テ、之ガ究明ニ依リテ本種ノ普及改良上ニ遺憾ナキヲ期セントス」〔樺太庁中央試験所：1939：22〕ためであった。つまり犬の品質を落とさず低価格の飼料で効率よく犬を繁殖させるための試験であり、同年9月、敷香管内から牡1頭、牝2頭が購入され、かかる飼料費用や供試犬の体重増加量などが調査された。以降、1940（昭和15）年まで試験は継続されるが、1939（昭和14）年から飼養試験に加え、「挽牽能力」検査も実施されるようになり、供試犬も年を追うごとに増やされていった〔樺太庁中央試験所：1941ほか〕。

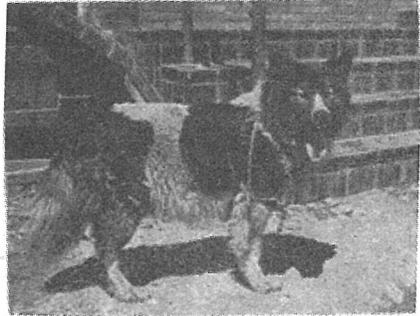
樺太犬の軍用化に向けた試験は中試の飼養試験の前年、1935（昭和10）年から進められていった。同年8月青森県大湊要港部に「純樺太犬」7頭が供出され、北辺警備のため自動車や馬櫓の「代用機関」としての犬櫓に使用される予定で試用試験が実施されたのである（『樺日』1935年12月15日）。さらに1938（昭和13）年には、旭川第七師団へ試験的に数頭が「猷納」され、翌年から「新軍犬」として採用が決定した（『北海タイムス』1939年1月1日付）。この時期、軍部だけでなく島民の間でも樺太犬の軍用犬化が胎動し始めたようである。『樺日』1938年2月15日付では大泊で「大泊軍用犬倶楽部」の発会式が挙行され、同夜開かれた座談会において「将来に向かつて樺太軍用犬育成の為め努力する事になつた」ことが伝えられている。また「東京高等獣医学校の学生」〔藤島：1941：46〕であるという藤島彦夫なる人物が、1941（昭和16）年「樺太犬保護論」と題する小論を雑誌『樺太』に発表している。そのなかで藤島は樺太犬の軍用犬としての適性はシェパードに劣るため軌曳犬として利用すること、すなわち用途による使い分けをすることを提案している〔藤島：1941〕。

『樺日』では1937（昭和12）年、樺太庁博物館が「純血」の樺太犬の飼育をはじめたことを伝えている（『樺日』1937年11月23・26日付）。記事によるとその目的は純粋の樺太犬を保護・繁殖させること、ゆくゆくは天然記念物に指定することであった。同館館長で植物学者の菅原繁蔵は『樺日』1938年1月1日付、「昭和十二年中の／郷土研究上の収穫」において樺太庁博物館の昭和12年度の研究成果を発表している。そのなかで菅原は「樺太犬の発見」と題し、樺太犬の天然記念物指定を申請する意向を伝えている⁽⁵⁾。曰く、内地において土佐犬や狎、そして北海犬が次々と天然記念物に指定されているが、樺太犬は有史以前から交通機関として、また白瀬中尉の南極探検において偉功を奏すなど「日本犬と同じく天然記念物として指定せらるゝ有資格者」であるという⁽⁶⁾。菅原が樺太犬の天然記念物指定を推進したのは、さきに触れたように内地の畜犬熱の影響を受けてのことだと考えられる。日本犬保存会会長、斎藤弘吉は1937（昭和12）年1月、北海道および樺太へ日本狼に関する調査へ出かけているが、そこで菅原との交流があったのである。彼は同年1月20日から22日までの樺太滞在中に「豊原・道庁博物館」へ赴き菅原と会い、貝塚から出土した犬属骨の調査を行ったのである〔斎藤：1964：195-197〕。

樺太犬の起源を日本犬としたのは菅原だけではなかったが、樺太庁博物館の高橋多蔵は、はっきりとこの説を否定している。高橋は「現今樺太犬と称せられる犬の種属、体形、由来等の検討を為すは樺太犬の基礎研究のみならず、本島の考古学、民族文化の研究上重要な示唆を与へるものであらう」〔高橋：1940a：67〕と述べ、島内の貝塚から発掘した先住民族が飼養していた犬の頭蓋骨や骨格等の考古学資料から樺太犬の系統を考究している。

彼は『樺日』1938（昭和13）年3月23日付記事を通じ「或る愛犬家の説に拠れば樺太犬は北海道アイヌ犬の混血なる事を強調するものあれども筆者は斯の説には賛意を表し難い」と日本犬説を否定しているが、学術的見地からこの説は退けられることになる。ちなみに、『樺太庁博物館案内』には博物館の玄関先に設置されている北緯五十度線の「国境標」の実物大の模型の右手に二頭の樺太犬が「金網の中に収まつて来館者を迎へて」いたとある〔樺太文化振興会：1941：7〕。この二頭が先年、保護ならびに繁殖のため買い上げられた「純血」の樺太犬であろう（図4）。

このように樺太犬の実用化、研究がともに進展してゆくなかで、『樺日』1938年3月28日付「黙々と労働奉仕！／愛すべきかな樺太犬／蕩進する姿・正に街の戦士」と題された記事からは樺太犬保護の機運が高まっていったことがみえてくる。



吹雪を突いて蕩進する樺太犬の姿は真に颯爽たるものである、樺太に住んで居つては彼等犬が如何に

図4 樺太庁博物館で飼育されていた樺太犬（『樺太庁博物館案内』1941年、7頁）より

働きつゝあるか余りに慣れ過ぎて居る為めに殆ど当り前の如くにその大なる功績が忘れ勝ちである、(略)／我々の目から見る「樺太犬」は現に第一線に活躍しつゝある毛むくぢやらで沢山なのである学問的な系統に就いてはその通り研究家にまかせて置けばよい斯かる存在でありながら樺太の犬種と称して何か単なる名物の如く見られてゐるのは彼等にとつても大いに不満がある、優秀な樺太犬を養成し、力においても智力においても洋種の犬に伍して負けない後の特産品を作るだけの豊富が望ましい唯犬種をひかせて叩き廻し働けなくなれば撲殺すると云つた従来の考へ方は完全な誤りである、一定の組織と方針を樹立して種の改良或ひは血統の完成と専門的研究が続けられてもいゝ時期である斯くて斯界に誇るに足る樺太犬を養成することが彼等の労働、並に功績に対する最大の論功行賞であらう、あの零下何十度の寒空に種をひく犬の姿を見る時我々は彼等の形質に十分将来性を発見し得るであらう。

ここでは、「余りに慣れ過ぎて居る為めに殆ど当り前の如く」であつた樺太犬の日常的な労働が照射され、従来の飼い方に対する批判や保護のための具体的な組織の設立が要請

されている。注目したいのは、島民の生活と樺太犬との結びつきが強調され、「力においても智力においても洋種の犬に伍して負けない」樺太産の「樺太犬」を創り出す必要が説かれている点である。これが新聞記事であるという以上、樺太犬の存在を一般島民に普及させるための、いわゆる上からのものであったことは否定できないが、樺太犬を、樺太を代表する「樺太犬」として保護ないしは産出しようとする機運が高まっていったことがここから看取できよう。日常生活のなかにいた樺太犬は発見され軌曳能力にすぐれた樺太産の「樺太犬」として、創りだされようとしたのである。とはいえこの記事において樺太犬の「学問的な系統」は関心の外にあり、注目されたのは、日常生活における樺太犬すなわち「毛むくぢやら」の犬たちであった。

1939（昭和14）年3月には、犬飼が樺太庁の要請を受けて南樺太北部の敷香庁において樺太犬の性能、体形、飼育管理状態、食糧などの基礎的実施調査を実施し、保護策を講じている〔犬飼：1970〕。犬飼に調査を委託したように、樺太庁でも樺太犬に積極的に取り組みはじめる。それに関して『樺日』では「樺太犬の性能は既に实际的に認められ、北大の権威犬飼教授も先年熱心に研究した結果その保護の緊要なることを説いてゐるが最近には軍に於ても北方作戦に有能なる事を立証してゐる折柄、樺太庁でも愈々樺太犬の保護に積極的乗出しをなす事となり目下具体計画を樹てゐる」と伝えている（『樺日』1939年8月19日付）。つまり樺太犬の価値が公的に認められたのであり、樺太庁では樺太犬の保護を制度として実行しようとしたのである。

このときの調査報告のなかで犬飼は樺太犬による木材の搬出作業について言及しているが、『樺日』でも、「一組十頭の犬で一日の働き高が十七八円から二十円位犬一頭一日の糧食費は五十銭位だといふから一組で五円馭者の労銀を五円と見ても一日七八円から十円位の利益がある勘定になり馬以上の働きをなした」と馬よりも能率の上がることを示し、「冬季のバツ曳きに夏山のトロ曳きに今後馬の領域を奪つて造材現場に進出する樺太犬の数は益々増加すること、ならう」と期待している（『樺日』1939年11月1日付）。木材の搬出作業のように樺太犬が必要とされるようになった主だった理由の一つは馬の「代用品」としてであった。代用品としての犬の需要は木材の搬出に留まらず、郵便物等の運送にも犬糧が使われることになった。『樺日』1940年9月20日付記事では時局悪化による「深刻な人的資源」不足のため、真縫・久春内、野頃・散江、小泊・浅瀬の三路線で犬糧による奥地での運送が開始されることになったと伝えている。このほか、樺太犬の「抜け毛」にも代用品としての価値が与えられた。時局の折柄、内地では毛織物製品の原料となる羊毛が不足したため、「代用」として樺太犬の「抜け毛」に白羽の矢がたったのである（『樺日』1941年1月31日付）。

ところで「敷香樺太犬協会」が設立された敷香ではまた、京都探検地理学会による犬橿訓練が実施された。京都大学探検理学会では白瀬中尉につづく南極探検をめざして樺太踏査隊が組織され、1940（昭和15）年12月から翌月まで、敷香において犬橿訓練を実施した。本調査に参加した梅棹忠夫は、「探検の立場から（の）イヌそり研究の第一歩」〔梅棹：1990（1943）：36〕であったと位置づけており、その成果を「犬橿の研究」と題する論考としてまとめている〔同〕。なお、樺太踏査隊の動向は『樺日』でも逐一伝えている。この他、竹内恭は卒業論文として昭和20（1945）年3月から4月発句まで、敷香地方において樺太犬の体型や飼育管理を主とした実態調査を実施している〔竹内：1958〕。

樺太犬が発見されたのは、戦争という時世の影響を受けてのことであり、時が下るにつれて活躍の場は広がっていった。軌曳犬としての労働価値が認められると、今度はより性能のよい「樺太犬」種を創りだそうとする向きへと変わっていく。単なる「名物」ではない、軌曳能力にすぐれた樺太犬種の創出、そして増産が求められたのである。

3. 樺太犬の創出

樺太犬研究および実用化の際に課題とされたのは、樺太犬の保護であった。樺太犬はからだの大きさ、毛の長さによって長毛種と短毛種に大別されるが、実際には厳密に区分できる状態にはなく、川村が先に述べていたように、「何れを以て純粋樺太犬と見做すべきか判断に苦しむ状態」（『樺日』1937年6月28日付）、あるいは「今では昔の樺太犬と云ふやうな、所謂体型を備へたものが、特殊な人か、さもなければ交通不便な敷香方面にでも、行つて探さなければ、一寸見受けられない状態」〔有松：1937b：127〕となっていた。また犬飼は軌曳力を増すため土佐犬ら大型犬種と在来の樺太犬を掛け合わせた「雑犬」が多いことを報告している〔犬飼：1939：6〕。つまり雑種化と「純粋」な樺太犬の減少が樺太犬の現状であり問題であったのだ。そこで樺太犬の保護、そして、より性能の高い軌曳犬を創り出すための改良の方策が講じられたのである。

有松や川村ら愛犬家、そして犬飼や樺太庁では「樺太犬」創出のための保護策を講じている。それは優秀な犬の保護、改良といった実践に加え、畜犬税の免除、保護区および保護団体の設立等の制度を整えることであった。一例として有松の保護策をみてみよう〔有松：1939〕。彼が重きを置いていたのは「改良」であった。樺太犬の外形や性能において基準となる標準的な「規格」を決定し、その規格にあう犬を保護すべき「母体犬」とし、母体犬同士を掛けあわせることによって優秀な「樺太犬」を創り出す。このような改良のプロセスを経た次が「保護」であり、「犬籍制度」および管理組織「樺太犬協会」を設置するなど優秀犬の把握・管理制度を整えるとともに、「野犬駄犬の整理淘汰」の実施を提

案する。次いで畜犬税の免除・保護犬制度の設置・展覧会、共進会、競技会の開催・移輸入犬にたいする検疫等、「保護」の制度を整える。展覧会等では、犬の血統や外形が判断されるが、それに加えて「能力試験（軌引試験）」の実施を提案しており、さきの「畜犬陳列会」は保護論の一つであったのだ。有松はまた性能だけでなく、「体形之美と云ふ点についても考へて真によい犬に改良して行かねばならぬ」[同：46]と、性能と体形美とをあわせ持った「樺太犬種」を創りだすことを目的としていた。

犬飼は樺太犬の「保護増殖案」として二つのことをあげている[犬飼：1939]。それはいたってシンプルなもので、一つは保護区域の指定、二つは雑種犬を淘汰すること、であった。これは規格に沿わない犬を殺処分あるいは去勢することで、従来「樺太犬」として一括りにされていた在来の犬は、軌曳犬としての適性や外形から純粋、優良な犬のみが「樺太犬」として選択されるようになるのである。保護区には家用に、また、冬期の冬山の造材所に犬を供給するなど樺太のなかで樺太犬優良種が比較的多く飼育されている北部の多来加方面があげられている。保護区の指定後は、優良犬の指定、劣等犬の去勢、予防接種の無料化、獣医による飼育管理、畜犬税の免除、雑犬の移入の全面禁止ならびに許可制をとること、をあげている。このほか、樺太犬の毛皮の利用価値についても言及している。犬飼は軌曳犬としての性能を重視するため、天然記念物指定にたいしても否定的であった。曰く、「天然記念物として保存される場合今迄は専ら体形に重きを置いているため、従来優れた性能を持っていた犬種も次第に愛玩用化して来た」[犬飼：1939：9]ためであった。犬飼は樺太犬の性能に重点を置いていたのである。

犬飼の調査結果をもとに樺太庁でも樺太犬の保護に乗り出したことは『樺日』でも伝えているが、実は犬飼は、この調査結果を公にしなかったようである⁽⁷⁾。曰く、「そのころカラフトには北部軍の出先がいて、ソリ犬の利用を考えていたため、発表することをさしひかえなければならぬ事情であった」[犬飼：1959：36]。しかし『樺日』1939年8月19日付記事では保護案として次のことが提示されている。すなわち幌内川以北を繁殖保護区域とすること、雑種犬の根絶を図ること、規格を定め優秀犬を種犬に登録すること、劣種は法規にしたがって去勢すること、訓練・販路にも積極的に乗り出すこと、保護協会を組織し、協会では研究そのほかの事業を実施すること、である。なお、当年は計画のみで具体的な活動は翌年以降から実施される予定とされていた。しかし、実際のところ保護対策の制度化はなかなか進展しなかったようである。たとえば『樺日』1940年8月20日付では、「樺太庁ではこれが保護繁殖に説教的対策を講ずると共に樺太犬保護規則を設け近く公布実施するものと見られてある」とある。また、翌1941年1月28日付では、「(…)純粋の樺太犬は近来著しく減少する傾向にあるので樺太庁ではこれが保護繁殖を図

るため積極的対策を講じてゐる」と未だ保護規則は制定されていない。確認した限りでも1942（昭和17）年までに出された法令のなかに保護規則に該当するものはみられず、制定の是非は今後の課題としたい。

これら保護策のなかで注目したいのは保護組織の設立と販路の開拓についてである。販路の開拓について川村は、「(…)内地にも適するやう改良を加へたならば、樺太の特産物として商業的意義を持つまでに発達し得る可能性があると思ふ」[川村：1938：73]と樺太犬の商品化を提案している。樺太犬の創出は、挽曳能力に特化した「樺太犬」種を確立することのみを意味していない。樺太「産」の挽曳犬＝樺太犬として島外へ流通することではじめて完成するのである。

以上見てきたような対策はどの程度実現されたのだろうか。樺太庁が保護組織を設立し実際に樺太犬の供給を斡旋していたかは今のところ明らかにできていないが、樺太では樺太庁以外に保護団体が設立され、島外へ供出されていた。たとえば軍用犬としての樺太犬の島外移出について『樺日』1940年1月28日付、「さらば“郷土”よ／樺太犬颯爽と旭川へ」と題された記事では次のように伝えている。「石田部隊では樺太犬の性能に着目して此の度樺太庁を通じて敷香支庁へ優良犬の入手斡旋方を依頼して来たので、支庁では土人事務所当局と慎重に選考の結果此の度〇頭〔ママ〕を発送することとなつた、樺太犬に対しては各方面から関心を払はれてゐるので今後も相当の購入申込みがあるものとして当局では優良犬の育成に対し大いに奨励することとなつてゐる」。また同年8月20日付では、秋田の造材現場において馬の代用に樺太犬を使用するため、敷香で結成された「樺太犬協会」に35頭の斡旋を依頼してきた、とある（『樺日』1940年8月20日付）。同記事によればこの「敷香樺太犬協会」は1939（昭和14）年に設立され「庁の保護繁殖対策と共に『樺太犬の血』を護るため適当な保護対策を講ずることになつた」とあり、その具体策として「飼育方法、食物等を科学的に研究して増殖を図ると共に体質をも改良せんとする」ことがあげられている。このほかにも『樺日』では1940（昭和15）年に「樺太犬組合」が設立されたことを伝えている（『樺日』1940年5月10日付）。

樺太では、保護と改良の実践を通じて「樺太犬」を創るだけでなく、その流通も視野に入れられ、他方ではすでにそれが実行されていたのである。

おわりに

本稿では樺太犬の実用化と基礎的研究が進展していった1930年代の僅かな期間を対象として樺太犬がどのように発見されていったのか、その過程をたどってきた。先行する樺太犬研究としては動物行動学者の犬飼哲夫による功績がおおきく、彼は戦前の樺太領有時

代から戦後の南極観測事業にいたるまで樺太犬がたどってきた歩みに伴走してきたといえる人物である。本稿でとりあげた樺太島民と樺太犬との関係についても網羅されているが、新聞紙面を通じて樺太犬の足跡をたどることにより、犬飼の先行研究をある程度跡づけることができたと考える。

まず、樺太犬にたいする関心の高まりを示す場面として1936（昭和11）年に開催された「畜犬陳列会」をとりあげ、この催しの意義について検討した。すなわち、「畜犬陳列会」には樺太犬の価値を樺太島民に再認識させることが目的にあったこと、また、樺太犬への注目には軍用犬化や内地の日本犬熱の影響をうけたものであったことを確認した。次に、この当時に樺太犬が置かれていた状況、すなわち軍用犬化と馬匹代用としての実用化といった背景を総覧した。それを通じて樺太犬が労働力としての需要から輓曳犬としてあらためて発見され、性能のすぐれた「樺太犬」という存在として創出されようとしたことがみえてきた。なおここでは、内地の犬に劣らない優秀な樺太産の犬を創りだそうとする意向が垣間見えた。しかし、いま現在、樺太犬という犬種が存在していないことから明らかに、樺太を代表する「樺太犬」という犬種の確立、すなわち創出しようとする試みは未完のまま終わったと言わざるをえない。

ところで本稿では取りあげていないが、樺太犬は樺太への出稼ぎ労働者たちによって明治以降、北海道へ移出されていた。北海道では、南極観測におけるタロとジロのような長毛種が多く、そこでも各種輓曳の途についていた。十数年ほど前、樺太犬を復活させようと稚内の有志が立ちあがり「樺太犬協会」を設立し、1999（平成11）年に種犬としてサハリンから樺太犬の仔犬を譲りうけてきたが、繁殖は思うように進まなかったようである。彼らの諸実践が示しているように、未完成のまま姿を消した「樺太犬」は人びとの記憶のなかにいたのである。

謝辞 本稿作成にあたって、稚内市教育委員会の斎藤譲一氏から樺太犬関連の諸資料、および写真を提供していただいた。北海道開拓記念館の会田理人氏から『樺太日日新聞』記事の提供、およびアドバイスをいただいた。記して感謝申し上げる。

注

- (1) 1940（昭和15）年に開幕する予定だった「幻」の第5回冬季オリンピックは札幌で開催されることに内定したが、そこでも「番外競技」として犬樞競争と馴鹿競争が企画されていた（「札幌」冬季オリンピック大会計画成る）『読売新聞』1937年11月9日付）。
- (2) 実は樺太犬の軍用犬化はすでに軍用犬研究班によって着手されており、秋田犬や樺太犬

- は弾薬を戦線に供給するための訓練が施されていた（『畜産と畜産工芸』1923年、14頁）。
- (3) 「オタスの杜」は1927（昭和2）年、樺太庁がウィルタヤニプフを保護する目的で、かれらを強制的に移住させて作った集落である（菊池俊彦「北の民俗誌—解説」谷川健一編『北の民俗誌』三一書房、1997年、559頁）。「オタスの杜」は樺太の観光コースにも組み込まれており、異郷の雰囲気漂わせる観光地として売り出されていた（『樺太観光コースひとめぐり』『樺太庁報』第4号）。
 - (4) 日本犬保存会の理事であり、天然記念物指定の評議員であった鍋木外岐雄は日本だけでなく植民地でも「日本犬」を捜していた。「昨年日本犬の一系統を代表すと看做される秋田犬が、天然記念物に指定されたのは如上の理由に拠るものであるが、独り秋田犬のみならず内地諸地の山間僻地に残存して居る犬、北海道、千島、台湾、朝鮮等の近接地域の犬の研究は最も肝要と思われる」（鍋木外岐雄「犬と人生」『日本犬保存会五十年史』日本犬保存会、1978（1932）年、10頁）。
 - (5) 記事内容は1937年11月23日付の記事と同じであることから、11月23日付の記事は菅原が執筆したものであろう。
 - (6) 日本犬として天然記念物指定を受けているのは秋田犬、甲斐犬、紀州犬、越の犬、柴犬、土佐犬、北海道犬である。また、ここでいわれている「北海道犬」とは北海道犬のことであろう。
 - (7) 研究成果は戦後、北方先住民族と樺太犬との歴史的関係や南極観測事業における樺太犬調査の成果とあわせて「樺太犬考（一）」（1957年）、「樺太犬考（二）」（1958年）として公表された。

引用・参考文献

- アロン・スキヤブランド（本橋哲也訳）2009『犬の帝国—幕末ニッポンから現代まで—』岩波書店
- 新井博 1997「日本スキーの開拓者桜庭留三郎—大正時代初期から中期までの樺太での活躍—」日本スキー学会誌編『日本スキー学会』第7号
- 有松志郎 1937a「樺太犬を語る No.1」『樺太庁報』第7号
- 1937b「樺太犬を語る No.2」『樺太庁報』第8号
- 1939「樺太犬の保護と其の繁殖」『樺太』第7号
- 犬飼哲夫 1939『樺太犬の調査』（北海道立図書館所蔵・マイクロ資料）
- 犬飼哲夫・芳賀良一 1957「樺太犬考（一）」『北方文化研究報告』第12号、北海道大学北方研究室
- 犬飼哲夫・竹内恭・芳賀良一 1958「樺太犬考（二）」『北方文化研究報告』第13号、北海道大学北方研究室
- 犬飼哲夫・加納一郎編 1959『からふといぬ—南極へいったソリ犬たち—』日本評論新社
- 今川勲 1996『犬の現代史』現代書館

- 梅棹忠夫 1990 (1943) 「イヌぞりの研究」『梅棹忠夫著作集 第1巻』中央公論社
- 樺太庁中央試験所 1939～1942『業務概要』(昭和11～15年)
- 樺太文化振興会 1941『樺太庁博物館案内』
- 川村秀弥 1938「樺太犬雑俎—秦日保理事に酬ゆ—」『犬の研究』第4号、犬の研究社
- 1938b「樺太犬雑俎(2)—秦日保理事に酬ゆ—」『犬の研究』第5号、犬の研究社
- 1938a「樺太犬私見」『樺太庁報』第18号
- 1938b「樺太犬私見NO.2」『樺太庁報』第19号
- 斎藤弘吉 1964『日本の犬と狼』雪華社
- 志村真幸 2008「日本犬保存会と天然記念物」『歴史文化社会論講座紀要』第5号、京都大学大学院人間・環境学研究科歴史文化社会論講座
- 全国樺太連盟編 1978『樺太沿革・行政史』
- 高橋多蔵 1940a「樺太犬に就いて—主として系統学より観た樺太犬の由来—」
———— 『樺太時報』第5号
- 1940b「樺太犬に就いて(2)—主として系統学より観た樺太犬の由来—」
———— 『樺太時報』第6号
- 1940c「樺太犬に就いて(3)—主として系統学より観た樺太犬の由来—」
———— 『樺太時報』第7号
- 1940d「樺太犬に就いて(完)—主として系統学より観た樺太犬の由来—」
———— 『樺太時報』第8号
- 高橋安部衛編 1937『樺太拓殖共進会誌』大泊町
- 竹内恭 1945「樺太犬」『北海道学芸大学紀要』第9巻第1号
- 中尾重一 1981『樺太・資源交通史』
- 日本犬保存会 1978『日本犬保存会五十年史』
- 野添賢治・田村憲一編 1977『樺太の出稼ぎ—林業編—』秋田書房
- 『樺太日日新聞』 1934～1942
- 『北海タイムス』 1938～1939
- 『東京朝日新聞』 1929